

鹿島美術研究

年報第38号別冊

2021

「注意書き」

《三好企画のサイトに掲載されている本論文は全て著作権法により保護され、その著作権は筆者及び発行者・公益財団法人鹿島美術財団が保有しています。掲載されている論文の閲覧と印刷には制限なく、美術の研究にご利用ください。ただし、全文をコピーして流用することは断りします。

論文の引用にあたっては、筆者名、論文名、発行元、発表年月日を「出典」としてをご掲載ください。なお、Web掲載にあたり図版は削除しました。》

論文掲載『鹿島美術研究（年報第28号別冊）』2022年9月15日発行

鹿島美術研究

年報第38号別冊抜刷

2022年9月15日刊行

シャーマン・コレクションの調査と研究
——フランク・シャーマンが戦後日本美術に果たした役割を中心に——

佐藤 由美加

公益財団法人 鹿島美術財団

③ シャーマン・コレクションの調査と研究

——フランク・シャーマンが戦後日本美術に果たした役割を中心に——

研究者：北海道立旭川美術館 学芸課長 佐藤 由美加

はじめに

フランク・エドワード・シャーマン（Frank Edward SHERMAN 1917-1991）は、1945年来日し、GHQの民間情報教育局に属し、1946年から1950年まで凸版印刷株式会社（以下凸版印刷）で印刷編集の仕事を担当していた。近年まで日本美術史においてシャーマンの名前が登場するのは、1949年の藤田嗣治渡米に関して尽力したGHQ関係者としてのみだったと言ってよい。しかし、実際のシャーマンは、その後も長く日本に滞在し、多くの日本人と交友を続け、日米の美術界と繋がりをもった人物だった。

晩年、シャーマンは、長年にわたる日本人との交友を日本語で回顧録にしたいと考えていた。1990年、朝日新聞の美術記者だった米倉守が執筆者に予定され、翌年、シャーマンへのインタビューが実施される（注1）。しかし、同年10月にシャーマンが急逝したこともあり、回顧録の出版は実現せず、それにかわるものとして、1993年に写真集『履歴なき時代の顔写真 フランク・E・シャーマンが捉えた戦後日本の芸術家たち』（以下『履歴なき時代の顔写真』）（注2）が発行され、翌年には目黒区美術館で「フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち」展が開催される。シャーマンが死去した時点で所蔵していた収集品の全て、絵画、知人からの書簡、大量の写真、各国語の書籍や雑誌・展覧会図録等は、親交のあった河村泳静が継承し、2007年以降、伊達市教育委員会に寄託されている（注3）。藤田の油絵などは生前に手放しており、現在のシャーマン・コレクションとは、河村泳静所蔵（伊達市教育委員会寄託）のものを指し、また、その中には、1993年の写真集及び翌年の展覧会関連資料も含まれている。

これらは、戦後の日本美術界を映し出す貴重な資料であるが、藤田嗣治に関連するもの以外は、これまでほとんど公開されたことがない。本稿は、シャーマン・コレクションを通じて、シャーマンの日本での足跡及び、彼が戦後日本美術に果たした役割を明らかにしていこうとするものである。

シャーマンとそのコレクションについて

シャーマンについては、ここ10数年ほど藤田嗣治や占領下の日本美術に関する研究

が進展する中で少しずつ言及されることが増えてきており、それらについては拙稿「フランク・シャーマンの戦後日本における交友と活動の軌跡—1948年の写真と手紙を中心に」において詳細を紹介している（注4）。

シャーマン没後のコレクション紹介としては、次の4つが主要なものである。前掲『履歴なき時代の顔写真』は、インタビューの過程で回顧録と別に発行の話が浮上したもので、藤田嗣治はじめ多くの人物写真、シャーマンのインタビューからの抜粋、交友があった猪熊弦一郎、脇田和、仙波二郎の〔談〕が掲載されている。『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』展図録は、シャーマン旧蔵の日本人画家中心に80点以上の作品を掲載、米倉守、神奈川県立近代美術館時代から40年以上シャーマンと交友があった朝日晷、目黒区美術館学芸員の矢内みどりによるテキストが掲載されている（注5）。この2つは、シャーマンと直接親交があった人々の証言が集約された貴重な記録である。

3つめが『河村泳静所蔵 フランク・シャーマン コレクション選』であり、『なぜ日本はフジタを捨てたのか』著者・富田芳和のテキスト、作品図版260点以上を掲載、2021年現在、作品図版掲載数が最も多い出版物となっている（注6）。最後が拙稿「フランク・シャーマンの戦後日本における交友と活動の軌跡—1948年の写真と手紙を中心に」である。シャーマン・コレクションには数千点に及ぶ写真と400点を超える書簡があるが、ごく一部を除いてほとんどが未公開・未整理である。それらに関連作家資料と照合し、書簡10点あまり、写真約90点を紹介、1948年中心にシャーマンの日本における足跡と交友を紹介した。その結果、シャーマンと日本との関わり方が、日本滞在中とそれ以降で変化していることがわかった。本稿では、その変遷を紹介する。

1940年代

学生時代にデザインや商業イラストレーションを学んだシャーマンは、戦前は、広告デザインなどの仕事に従事していた。1945年に来日し、最初は丸の内のGHQ、その後、新宿の伊勢丹で地図製作に携わり、1946年から凸版印刷板橋工場で、本国から送られてくる雑誌などを占領軍向けに再編集して印刷する仕事につく。現在、日本で知られているシャーマンの経歴は、この凸版印刷時代に藤田嗣治と親しくなり1949年の藤田渡米のため尽力したこと、社内に通称「シャーマン・ルーム」と呼ばれた部屋を設けて、多くの日本人と交友したことである。

丸の内にあるGHQ本部から再編集したグラビアや雑誌を印刷するため板橋の工場まで車で往復していたシャーマンは、じきに凸版印刷内に専用事務所をかまえる（注

7)。GHQが凸版印刷を訪問したのは終戦の翌月で、米軍が押収した日本地図の英語改訳版の印刷を命じられた。その後、民間情報教育局の仕事も持ち込まれ、ニューズ・ウィーク、星条旗新聞など、軍および半官半民のアメリカ関係の印刷物受注が多くなる（注8）。シャーマンが担当していたのはこれらの受注物だったと思われる。

「シャーマン・ルーム」について、毎日新聞記者だった船戸洪吉によれば「工場の一部、倉庫の片隅を改装したもの」でかなりな広さだったという（注9）〔図1〕。シャーマンには別に宿舎があったが、凸版で寝泊まりすることも多く、シャーマンの部屋にはキッチンとベッドが設置され、通訳のベッドも用意されていた（注10）。日系二世のグローヴ吉原という人物がシャーマンの通訳だったが、数名の社員も通訳や秘書の役割を担っており、営業課の飯田、製本課長の庄司喜蔵、営業部渉外課の鈴木和夫の3人の名前がわかっている（注11）。

シャーマンは、凸版印刷に事務所をもつようになってほどなく、藤田を訪問し、親しく交友するようになる。藤田が凸版印刷の近くに住んでいることをシャーマンに伝えたのが社員であり、シャーマンが向井潤吉の紹介状を持参して藤田を訪ねたことはすでに複数の著述で知られている。シャーマンがはじめて藤田家を訪問した際には、庄司が同行していた（注12）。凸版印刷では、当時、戦後の新紙幣を印刷していたが、その新円図柄の審査員の一人が藤田であり、シャーマンが現れる以前から凸版印刷にとって藤田は仕事上の重要人物だった。1948年、シャーマンはさまざまな場所で藤田の写真を撮っているが、そのいくつかに飯田や庄司の姿がある（注13）。離日後、藤田が伊原宇三郎宛に書いた手紙（1949年6月4日付）に「シャーマンの下の飯田も猪熊の処に行ったり」「庄司等柳沢一派」とあり、シャーマンと親しかった村尾絢子の手紙にも「ミスターヨシワラはアメリカにかえりましたか、ミスタージョージ、ミスターイイダは元気ですか」という文面がある。これらは、庄司と飯田が、通訳と同じくらいシャーマンに近い存在だったことを伝えている（注14）。

シャーマンは、藤田を介して友人・後輩画家である猪熊弦一郎、岡田謙三、荻須高德、佐藤敬、澤田哲郎、中村研一、中村直人らと交友するようになる。とくに猪熊は、シャーマンの交流の輪を大きく広げた。猪熊夫妻は「トワ・エ・モア」と名付けたダンスの集いを持ち、当初の画家仲間から石坂洋次郎などさまざまな業界の人物が参加するようになっており、シャーマンもその常連の一人だった（注15）。「シャーマン・ルーム」を頻繁に訪れていた久邇邦昭〔図2〕は、猪熊のダンスパーティーでの写真が猪熊旧蔵アルバム（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵）の中にあることが確認できている。久邇は、飯田・シャーマンと親しい仙波二郎の学習院時代の友人であり、久邇

と猪熊をつないだのはシャーマンと考えられる（注16）。仙波は、猪熊文子のことを非常に社交的で「交流がなかった人達が交流を持てたのは、あの方の功績が大きかったと思う」（注17）と回想している。

頻繁にパーティーがあり、画家や文化人が集ったという「シャーマン・ルーム」だが、凸版印刷に赴任した1946年当時のシャーマンに日本の「画家や文化人」に関する知識があったとは考えにくい。実際に招待客を考案していたのは凸版印刷社員とその関係者であり、訪問客は藤田の知り合いや、凸版印刷に何らかのかたちで連なる人物が多かったと考えられる。

シャーマンのもう一つの交友の軸は版画家だった。占領下の滞日アメリカ人は版画に関心をもち、版画家の家を訪問して作品を購入することがよくあり、シャーマンもそうした一人だった。関野準一郎は1946年12月に恩地孝四郎家の晩餐会でシャーマンに会い、翌年4月の第15回日本版画協会展に《シャーマン氏の像》を出品している（注18）。“*Modern Japanese Prints: An Art Reborn*”（1956年）の著者オリヴァー・スタットラーが来日したのはシャーマンより2年おそいこの年である。関野の長男準平・次男洋作は、当時の数多いアメリカ人訪問客の中でシャーマンとスタットラーの二人を記憶しており、二人が一緒に来たこともあったという（注19）。関野は、シャーマンの通訳だった吉原とも親しくなっており、シャーマンが頻繁に関野を訪問していたことが伺える。当時、版画家同士は頻繁な往来があり、シャーマンは、平塚運一や太田耕士らとも交友を広げている。シャーマンのもとには1940年代後半から50年頃にかけて版画家たちからの手紙や年賀状が残っているが、関野はとくに長期にわたって交友が続いた版画家である。関野とシャーマンが長く親交を続けることが可能だったのは、師である恩地の長女三保子がGHQに勤めていて英語に堪能であり、二人のコミュニケーションを助けていたことも関係したのではないかと思われる（注20）〔図3〕。

1950年代以降

猪熊弦一郎は、前掲『履歴なき時代の顔写真』の中で「シャーマンさんという人は一体何をする人かさっぱり解らなかつた、というのが正直なところだ」と回顧している（注21）。これは、猪熊が1940年代から晩年までシャーマンと親交があったからこそその率直な感想といえる。1950年代以降のシャーマンは、日米を行き来し、両国の美術関係者とネットワークをもち、展覧会企画に関わるなど、多方面で活動したからである。

シャーマンがアメリカに帰国する1950年の5月、イサム・ノグチが来日する。猪熊はこのとき以降イサムと親しく交友するが、そのきっかけの一つをつくったのがシャーマンだった。シャーマンによれば、車を出してイサムを異母弟の野口通夫に会わせ、鎌倉の有島生馬・暁子親子の家を訪ね、父・野口米次郎の墓参りに連れていき、遅い時間に「友人の家があるから」と猪熊邸にイサムを連れていった（注22）〔図4～7〕。猪熊もシャーマンが「イサムを私の田園調布の家に連れて来た」と回想している（注23）。

帰国したシャーマンは、1年ほど美術の勉強のためフランスに滞在する。パリではすでに渡仏していた藤田嗣治や荻須高徳と再会し、アカデミー・グランショミエールに通いながら、美術館を見たりスペインを訪問したり、ヨーロッパ滞在を満喫している（注24）。このパリ滞在中、シャーマンは藤田が交友をもっていた若い画家・金山康喜と知り合っている（注25）。二人のパリでの交友は1年に満たないが、シャーマンは金山という画家に好感をもち、1959年に金山が東京で初個展を開催したときには、会場に集った関係者の姿を多くの写真に残している（注26）〔図8～10〕。

フランスから帰国した後、シャーマンは再来日し、1954年から翌年までアーニー・パイル劇場、その後は1959年まで座間キャンプで、アート・ディレクターとして働く。アーニー・パイル劇場（接收中の東宝宝塚劇場）は、当時は日本人が入れないアメリカ人向けのエンターテイメントセンターであり、シャーマンはその宣伝ポスターなどを手掛けた。座間キャンプでは軍関係の特別行事、慰問公演、スポーツイベント、演芸などの広報物を作成していた。

1955年、シャーマンは、神奈川県立近代美術館で学芸員の朝日晁と知り合い、朝日を通じて土方定一とも親交を持つ（注27）。朝日は、藤田作品を収集するシャーマンに情報を提供し、新しくコレクションとなる作家を紹介した。また、朝日、土方との交友は、後年、展覧会企画への協力という新しい役割へと繋がっていく。朝日と出会ったのと同じ年の9月、シャーマンは日本の創作版画90点をニューヨークのメルツァー・ギャラリー（Meltzer Gallery）に送って展覧会の仲介役を果たしている（注28）〔図11〕。

1958年1月、岡田謙三が7年ぶりに日本に帰国して8ヶ月ほど滞在し、シャーマンは古い友人の一人として自由が丘の岡田家を頻繁に訪問する。岡田は6月に個展を開催し、ニューヨークの画廊主ベティ・パーソンズを日本に招待する。ベティは岡田らと京都・伊勢などに旅行し、一行に同行したと思われるシャーマンは、写真を何枚も撮り、篠田桃紅と澤田哲郎の姿もある〔図12～14〕。この滞在を通してベティと親し

くなつたのではないかと推察され、1960年代半ば、ベトナムに一時赴任し、戦争画を描くプログラムに従事した際、シャーマンはベティに助言を求めている（注29）。

1959年、シャーマンは再度日本を離れて帰国する。同年6月、姉妹都市訪問記念として京都市からボストン市に茶室が寄贈され、裏千家第14代家元・千宗室がシェラトンホテルの茶会で亭主を、猪熊文子が客をつとめた。シャーマン・コレクションの写真には、千宗室と猪熊夫妻の写真が何枚もあり、このときの写真ではないかと推測していたが、猪熊旧蔵アルバム（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵）にはほぼ同じ別カット写真があることから、それを確認できた（注30）〔図15～17〕。

1940年代半ばからシャーマンと親しかった岡田と猪熊は、1950年と1955年にそれぞれ渡米してアメリカで成功をおさめた日本人画家となっていた。岡田や猪熊にとって戦後まもない時期から交友があるシャーマンは心強い存在だったはずである。ニューヨークの猪熊邸は訪米する日本人の社交場であり、シャーマンも常連の一人だった〔図18〕。10年を超えるシャーマンの日本滞在期の日本人との交流は個人的なものだったが、この頃から、それまでに築いた人脉を日米美術界の交流に生かそうとする活動が見られる。

1960年、ニューヨークのメルツァー・ギャラリー（Meltzer Gallery）で、澤田哲郎の個展を開催、1962年には同じくオズグッド・ギャラリー（Osgood Gallery）で「JAPANESE ARTISTS」展を企画している（注31）〔図19～21〕。

シャーマンは、アメリカで日本人画家を紹介するだけでなく、日本でのアメリカ人作家の展覧会企画にもいくつか関わっている。1959年から60年にかけて、朝日晁、土方定一とカルダー展開催について頻繁にやりとりした手紙が残っている。展覧会は実現しなかったが、このとき、アメリカにいるシャーマンと日本の朝日、土方との英文手紙の訳をフォローしたのが、座間キャンプ時代、シャーマンのスタッフの一人だったポール渡部だった〔図22〕。朝日は1970年に東京国立近代美術館で開催されたベン・シャーン展はシャーマンの「陰の助力」で実現したと述懐している（注32）。

おわりに

シャーマン・コレクションについては、藤田嗣治をはじめ交友のあった作家の研究者間で関心はもたれているが、調査が進んでいるとは言えない状況にある。拙稿「フランク・シャーマンの戦後日本における交友と活動の軌跡」および本稿でもシャーマンの多様な活動のごく一端を紹介したにすぎない。一部であるがシャーマン・コレクションの資料照会を可能にしたのは、ここで紹介した関連作家らの日記や手紙であっ

た。これらのプライベート資料は、作家存命中は公開されることはなく、本人と夫人が亡くなった現在、慎重に調査が進みつつある。

シャーマンがこれほど幅広い交友をもったのは、一つには彼が凸版印刷、アーニー・パイル劇場、座間キャンプと、日本で複数の職場をもち、そこで築いた人脈を日米で広げていったことによる。また、アメリカ人だったシャーマンの残した資料の中には、本来、日本人には入手し得なかったものも多く、それらが日本に原資料として残されている意義は大きい。コレクション調査の進展は交友のあった画家のみならず、戦後の日本美術における新たな事実を明らかにする可能性を秘めているからである。

謝辞

下記の方々より、貴重な資料のご提供やご助言をいただきました。記して感謝いたします。

一柳友子氏、今村圭吾氏、岩田希美氏、河村泳静氏、菅野晶氏、北湯口孝夫氏、桑原規子氏、佐藤幸宏氏、関野準平氏、関野洋作氏、中川経子氏、西田真氏、橋秀文氏、山地治世氏、脇田智氏

伊達市教育委員会、特定非営利法人 噴火湾アートビレッジ、北海道立近代美術館、美術の図書 三好企画、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

注

- (1) シャーマンの来日にあわせて、1991年2月2日、4日、5日、20日、27日数回にわたって実施。インタビュー：三好寛佳（美術の図書 三好企画）、通訳：中川経子、河村泳静同席、20、27日は米倉守も参加。今回、三好企画のご厚意でインタビューの音声データの一部を提供いただき、英語部分の文字起こしを行った。文字起こし：宮内愛
- (2) 『履歴なき時代の顔写真 フランク・E・シャーマンが捉えた戦後日本の芸術家たち』（米倉守監修、三好企画製作・発売）、アートテック、1993年
- (3) コレクション継承と寄託の経緯については『河村泳静所蔵 フランク・シャーマン コレクション選』伊達市教育委員会、2018年、4、5頁参照
- (4) 佐藤由美加「フランク・シャーマンの戦後日本における交友と活動の軌跡—1948年の写真と手紙を中心に」『北海道立美術館・芸術館紀要 第30号』北海道立近代美術館他、2021年
- (5) 『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』展図録、目黒区美術館、1994年
- (6) 『河村泳静所蔵 フランク・シャーマンコレクション選』北海道伊達市教育委員会、2018年 富田芳和『なぜ日本はフジタを捨てたのか 藤田嗣治とフランク・シャーマン 1945-1949』静人社、2018年
- (7) 「フランク・E・シャーマン Album」注(2)、76頁
- (8) 『凸版印刷株式会社六拾年史』凸版印刷株式会社、1961年、150頁

- (9) 朝日晷「藤田嗣治『日本脱出』の手紙」『芸術新潮』、1974年、87～88頁
- (10) 仙波二郎「『親日家』として、ハーンやライシャワー以上の貢献をした人」注(2)、88頁
- (11) 飯田については姓しかわかっていない。船戸洪吉『画壇 美術記者の手記 レアリスムの行方「藤田嗣治」』美術出版社、1957年、146頁、庄司喜蔵については「秘蔵写真館」『読売新聞』1988年5月11日、鈴木については注(2)、76頁、鈴木和夫『八十歳のラブレター』2006年、210～211頁
- (12) 1991年2月4日、シャーマンのインタビュー“ I went with a little man from Toppan. He was a chief of the bindery. And he was a charming little gentleman. Always laughing and carefree. Just perfect for Foujita. ”. 通訳にその人物の名前を問われ“Mr. Shoji”と答えている。
- (13) 注(4)参照。
- (14) 佐藤幸宏（監修・翻刻）、藤原乃里子（翻刻・校訂）、齊藤千鶴子（校訂）「藤田嗣治 伊原宇三郎宛書簡 1949-1956」『北海道立美術館・芸術館紀要 第27号』北海道立近代美術館他、2017年、2頁 「柳澤」は柳澤健、1948年に藤田らとの対談『パリの昼と夜』出版、印刷は凸版印刷。村尾絢子からシャーマン宛、日本語の手紙（V-B-3-0319）は年不明1月17日付、凸版印刷株式会社宛のため1947-1950年のもの。村尾は、当時、猪熊に師事しており、脇田和の家にシャーマンをはじめ連れて行ったのも村尾。
- (15) 猪熊弦一郎〔談〕「シャーマンさんの“シャッター・チャンス”」注(2)、7～8頁
- (16) 久邇邦昭（1929-）は旧皇族、1951年学習院大学卒業。仙波二郎の友人で「シャーマン・ルーム」に「しょっちゅう来ていた」注(2)、89頁
- (17) 仙波二郎注(2)、89頁
- (18) 『関野準一郎展』図録、青森県立美術館、2014年、193頁
- (19) 2020年3月、関野準平、関野洋作から聞き取り。
- (20) 2020年3月、関野準平聞き取り。関野からシャーマン宛英文手紙〔図3〕に関して、当時の父・関野が、自力でこの英文を書くことは不可能だったこと、また、文面の特徴や恩地孝四郎の名のアルファベット表記から、恩地三保子が英文を書いたものを父が書き写したのではないかと推察している。手紙の中には、シャーマンの通訳だった吉原の結婚についても書いている。また、1955年の関野の日記（遺族所蔵、資料提供：青森県立美術館総括学芸主幹菅野晶）に、シャーマンが準平・洋作を鎌倉へドライブに連れていったとの記載があり、二人もそのことを覚えている。
- (21) 猪熊弦一郎〔談〕「シャーマンさんの“シャッター・チャンス”」注(2)、8頁
- (22) 1991年2月5日、シャーマンはインタビューの中で“have a cup of coffee. Wouldn't you?” “A little further. My friend's house we could stop at. I know it's late, but they won't mind.” と言って田園調布の猪熊家に連れて行ったと語っている。
- (23) 注(15)、8頁。
- (24) 荻須美代子の手紙（1993年2月22日付）、シャーマンのインタビュー、注(14)「藤田嗣治 伊原宇三郎宛書簡 1946-1956」、4頁
- (25) 注(2)、63頁で、シャーマンは金山とグランショミエールで一緒だったとあるが、金山がグランショミエールに通ったという記録はない。
- (26) 写真の瀧口修三については、元・神奈川県立近代美術館学芸員の橋秀文からの教示による。
- (27) 朝日晷「SHERMANが見たもう一つの戦後の洋画史 その周辺とコレクション」注(5)、8頁にはじめての出会い「世界ガラス展会期中」とある。同展会期は1955年6月18日-7月31日

- (28) 桑原規子「駐留軍施設における美術展示空間-アーニー・パイル劇場と陸軍教育センター」『近代画説』No. 23、2014年、37頁
- (29) V-B-3-0043 1966年9月22日付 ベティ・パーソンズからシャーマンへの手紙、サイゴンのホテル宛。
- (30) 『空間に生きる画家猪熊弦一郎—民主主義の生活空間と造形の試み』展図録、香川県立ミュージアム、2021年、103頁 fig. 31が、図15、16とほぼ同じ写真。猪熊は、第15代家元・鵬雲齋千玄室（1923～）と親交があり、妻同士も親しかった。香川県立ミュージアム学芸員一柳夕子より情報提供。シャーマンはインタビュー中で、滞米中の千宗室を猪熊夫妻と一緒に案内したことを話している。
- (31) 澤田の個展会期は1月5日から30日。JAPANESE ARTISTS はSECTION I 9月17日-10月8日、SECTION II、10月9日-29日、伏木澄夫、糸園和二郎、水谷勇夫、富岡惣一郎、脇田和、伊藤隆康、小本章、中山爾郎、高橋秀、山田彊一、小田襄、辻晋堂、山崎脩、SHUZO HASEの14人。図録テキストは山田智三郎が執筆。“This exhibition has been arranged by Mr. Frank E. Sherman and Mr. Tetsuo Kojima, president of the Nihonbashi Gallery, Tokyo” とある。
- (32) 朝日晷「SHERMANが見たもう一つの戦後の洋画史 その周辺とコレクション」注(5)、9頁

図1 V-B-4-0910

左から山田三郎太、庄司喜蔵、
シャーマン、飯田、土門拳、占師 1948年

図2 V-B-4-0278 久邇邦昭

後ろの壁に藤田嗣治《植物の中の裸婦》が
あるため1948-50年頃

図3 V-B-3-0038

関野準一郎からシャーマン宛英文手紙
1952年2月26日付

図4 V-B-4-1373 写真集1 (シャーマンのアルバム)

イサム・ノグチ、野口通夫、有島生馬、暁子
1950年

図5 V-B-4-1373 (図4 上段)

イサム・ノグチ、有島暁子、
野口道夫

図6 V-B-4-1373 (図4 上段)

イサム・ノグチと野口通夫

図7 V-B-4-1057

有島生馬とイサム・ノグチ

*写真はすべてシャーマン・コレクション (河村泳静蔵)

書簡V-B-3、写真V-B-4の登録番号がついている。今後の照会のため、それぞれの番号を付した。

図8 V-B-4-0433
金山康喜個展会場（文藝春秋画廊）
左瀧口修三 1959年

図9 V-B-4-0377
金山康喜個展会場
左から佐藤繁次郎、
金山康喜 1959年

図10 V-B-4-0433
金山康喜個展会場（文藝春秋画廊）
右福島繁太郎 1959年

図11 V-B-4-0660
左から堀内義夫、シャーマン、関野準一郎
Yaesu Hotelにて 1955年

図12 V-B-3-0891
左から2人目山田智三郎、岡田謙三、澤田哲郎、
右端ベティ・パーソンズ 1958年

図13 V-B-4-0348
左から岡田謙三、澤田哲郎、篠田桃紅
一人おいてローリー・ウェッソ、
ベティ・パーソンズ
右端山田智三郎、前列女性岡田きみ 1958年

図14 V-B-4-0368
左から澤田哲郎、篠田桃紅、岡田謙三、岡田きみ
ローリー・ウェッソ
右からベティ・パーソンズ、シャーマン 1958年

図15 V-B-3-0343 中央猪熊文子 ポストン 1959年

図16 V-B-4-0343 千宗室 ポストン 1959年

図17 V-B-4-0402 左端猪熊文子一人おいて
猪熊弦一郎、一人おいて千宗室 1959年

図18 V-B-4-0456 左から3人目猪熊文子、右端猪熊弦一郎
一人おいて篠田桃紅、前列イサム・ノグチ NYの猪熊邸

図19 V-B-4-0701 左からシャーマン、一人おいて
児島徹郎一人おいてポール渡部 1962年

図20 V-B-4-0701 JAPANESE ARTISTS展会場
(Osgood Gallery) 1962年

図21 V-B-4-0469 左から富岡聡一郎、
小本章、山田彊一 1962年

図22 V-B-4-0674 後列左から2人 番目ポール渡部、
右シャーマン 座間キャンブ 1950年代

鹿島美術研究(年報第38号別冊)

2022年9月15日発行©

公益財団法人 鹿島美術財団

〒107-8502

東京都港区赤坂6丁目5番30号

鹿島建設 KI ビル 8階

電話 03(3582)5920

FAX 03(5561)2016

方法の如何を問わず、無断で全部もしくは
一部の複写・転載を禁ず。